

# 博物館 アラカルト 21

## ●「黄葉夕陽村舎」の由来について

菅茶山は、備後神辺宿の川北（現福山市神辺町川北）に私塾・黄葉夕陽村舎（のちに廉塾）を開きました。それは、天明年間（1781～1789）の初年頃といわれています。この「黄葉夕陽村舎」の名前はどこから名づけられたのでしょうか？

「黄葉」は、廉塾の南西にある「黄葉山」に由来し、「夕陽」はその山の西側という意味で、つまり「黄葉山の西側に営まれる塾」ということです。「朝陽」は山の東側、「夕陽」には山の西側という意味があります。

茶山の塾には「金粟園」と呼ばれる塾もありました。その塾建物の側に桂樹（きんもくせい）があったことから「金粟園」と名づけましたが、この塾は京への遊学の後まもなく村童に教授をし始めた頃に利用されていたようです。時期は明和年間（1764～1772）の終わり頃ではないかと考えられています。

しかし、後に生徒の数も多くなったため、居宅の東北に学舎を建て、そこを「黄葉夕陽村舎」と名づけました。それから「黄葉夕陽村舎」が主な学問の場になったと考えられます。後に「廉塾」と呼ばれますが、名づけたのは寛政の三博士の一人である柴野栗山です。「廉塾」という名前がどこから来ているのかははっきりとわかりません。

黄葉夕陽文庫資料の書籍などには「金粟園蔵書」という朱印が押されていることがあります。もともと「金粟園」にあったものを後に「黄葉夕陽村舎」に移したのでしょう。

「黄葉」は「もみじ」とも読みますが、「紅葉」ではなく、「黄葉」と書くことについて茶山は、「この山は俗に紅葉山というが、万葉集には黄葉と書いている。」ことからモミジでも「黄葉」を当てるのが正解としています。

「茶山」という号も「茶臼山」（現在は要害山）に由来していますので、菅茶山は神辺という土地をとっても愛していたのです。

（主任学芸員 岡野将士）



特別史跡 廉塾ならびに菅茶山旧宅



講堂越しに黄葉山を望む